

大齋第 5 週間土曜日

アカフィストのスポタ

# 早課

2016 OSAKA

# 大齋第五週土曜日早課 『アカフィストのスポタ』 三歌齋經 P809

司祭 我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、

誦經 来れ、我等の王・神に叩拜せん。

来れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

来れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

## 誦經 第 19 聖詠

願くは主は憂の日に於て爾に聴き、イアコフの神の名は爾を扞ぎ衛らん。願くは聖所より助を爾に遣し、シオンより爾を固めん。願くは爾が悉くの献物を記憶し、爾の燔祭を肥えたる物とせん。願くは主は爾の心に循ひて爾に与へ、爾の謀る所を悉く遂げしめん。我等は爾の救を喜び、我が神の名に依りて旌を揚げん。願くは主は爾が悉くの願を成就せしめん。今我主が其膏つけられし者を救ふを知れり、彼は聖天より其救の右の手の力を以て之に對ふ。或は車を以て、或は馬を以て誇る者あり、唯我等は主我が神の名を以て誇る、彼等は動きて顛れ、唯我等は起きて直く立つ。主よ、王を救へ、又我等が爾に呼ばん時、我等に聴き給へ。

## 第 20 聖詠

主よ、王は爾の力を樂み、爾の救を歡ぶこと極なし。其心に望む所は、爾之を与へ、其口に求むる所は、爾之を辭まざりき。蓋爾は仁慈の祝福を以て彼をむかへ、純金の冠を其首に冠せたり。彼生命を爾に求めしに、爾之に世世の壽を賜へり。彼の榮は爾の救を以て大なり、爾は尊榮と威嚴とを之に被せたり。爾は彼に祝福を世世に賜ひ、爾が顔の歡にて彼を樂ませたり。蓋王は主を頼み、至上者の仁慈に因りて動かざらん。爾の手は爾が悉くの敵を尋ね出し、爾の右の手は凡そ爾を憎む者を尋ねださん。爾怒る時彼等を火爐の如くなさん、主は其怒に於て彼等を滅し、火は彼等を齧まん。爾は彼等の果を地より絶ち、彼等の種を人の子の中より絶たん、蓋彼等は爾に向ひて悪事を企て、謀を設けたれども、之を遂ぐることはざりき。爾彼等を立てて的となし、爾の弓を以て矢を其面に發たん。主よ爾の力を以て自ら擧れ、我等は爾の權能を歌頌讚榮せん。

誦經 光榮は父と子と聖神<sup>o</sup>に歸す、今も何時も世に、「アミン」

誦經 **【聖三祝文】【至聖三者】【天主經】**

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光榮は父と子と聖神<sup>o</sup>に歸す、今も何時も世に、「アミン」

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神<sup>°</sup>に帰す、今も何時も世々に、「アミン」  
天に在す我等の父よ、願くは爾の名は聖とせられ、爾の国は来り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に与へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘<sup>いざない</sup>に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋<sup>けだし</sup>国と権能と光栄は爾父と子と聖神<sup>°</sup>に帰す、今も何時も世々に、  
誦経 「アミン」

誦経 【トロバリ】

主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、吾が国に福を与へ、爾の十字架にて爾の住所を護り給へ。光栄は父と子と聖神<sup>°</sup>に帰す。

甘んじて十字架に上げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる住所に爾の恵を垂れ給へ、爾の力を以て吾が国を樂ませ、其諸敵に勝たしめ給へ、彼は爾が和平の武器、勝たれぬ勝を以て其助とすればなり。

今も何時も世々に、「アミン」

威厳にして恥を得しめざる轉達、至善にして讚詠せらるる生神女よ、我等の祈祷を斥けず、正教の人の住所を固め、吾が国を護り給へ、獨恩寵に満たさるる者よ、爾神を生みたればなり。

【重連禱】 通常の

輔祭 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐め、爾に祈る、聆き納れて憐めよ。

(詠) 主憐めよ。(三次)

輔祭 又吾が国の天皇、及び国を司る者の為に祈る。

(詠) 主憐めよ。(三次)

輔祭 又教会を司る我等の(府)主教( )の為に祈る。

(詠) 主憐めよ。(三次)

輔祭 又衆兄弟及び衆「ハリストティアニン」の為に祈る。(詠) 主憐めよ。(三次)

司祭 蓋<sup>けだし</sup>爾は仁慈にして人を愛する神なり、我等爾父と子と聖神<sup>°</sup>に光栄を帰す、今も何時も世々に。(詠) 「アミン」

(詠) 神<sup>°</sup> 父よ、主の名を以て祝讚せよ。(福をくだせ)

司祭 光栄は一性にして生命を施す分れざる聖三者に帰す、今も何時も世々に。(詠) 「アミン」

誦経 至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、人には恵臨めり。(三次)

主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす。(二次)

誦経 【六段の聖詠】

第3聖詠

主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は我が霊を指して、彼は神より救を得

ずと云ふ。然れども主よ、爾は我を衛る盾なり、我の榮なり、爾は我が首を擧ぐ。我が聲を以て主に呼ぶに、主は其聖山より我に聴き給ふ。我臥し、寝ね、又覺む、主は我を扨ぎ衛ればなり。環りて我を攻むる萬民は、我之を懼れざらん。主よ、起きよ、吾が神よ、我を救ひ給へ、蓋爾は我が諸敵の頬をうち、惡人の齒を折けり。救は主に依る、爾の降福は爾の民に在り。

我臥し、寝ね、又覺む、主は我を扨ぎ衛ればなり。

### 第 37 聖詠

主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ、蓋爾の矢は我に刺さり、爾の手は重く我に加はる。爾の怒に依りて我が肉に傷まざる所なく、我の罪に因りて我が骨は安きを得ず、蓋我が不法は我が首に溢れ、重任の如く我を圧す、我の無智に依り我が傷腐れて且臭し。我屈まりて仆れんとし、終日憂ひて行く、蓋我が腰は熱に悩まされ、我が肉に傷まざる所なし。我力衰へて痛く憊れ、我が心の裂くるによりて號ぶ。主よ、我が悉くの願は爾の前に在り、我が歎息は爾に隠るるなし。我が心は戦ひ栗き、我が力は我より脱け、我が目の光も已に我にあるなし。我が朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が生命を覓むる者は網を設け、我を害はんと欲する者は我が淪亡のことを言ひて、毎日惡しき謀を圖む、然れども我は聾の如く聴かず、啞の如く己の口を啓かず、是に於て我は聞かなく、其口に答ふる所なき人の如くなれり、蓋主よ、我爾を恃む、主我が神よ、爾聴き給はん。我言へり、願くは敵は我に勝たざらん、我が足の跌く時、彼等は我に向ひて誇り高ぶる。我殆ど仆れんとす、我の憂は常に我が前に在り。我は我が不法を認め、我が罪の為に甚哀む。我が敵は生きて愈強く、故なくして我を疾む者は益多し、惡を以て我の善に報ゆる者は、我が善に従ふに因りて我の敵となれり。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の救主よ、速に來りて我を救ひ給え。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の救主よ、速に來りて我を救ひ給え。

### 第 62 聖詠

神よ、爾は我の神なり、我暁より爾を尋ぬ、我が靈は渴きて爾を望み、我が身は空しくして燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕ふ、爾の能力と爾の光榮とを見ん為なり、我が曾て爾を聖所に觀しが如し、蓋爾の愛憐は生命に愈る。我が口爾を讚美せん。是くの如く我生ける時爾を崇め讚め、爾の名に依りて我が手を挙げん。我が靈の飽かさること脂油を以てするが如く、我が口歡の聲にて爾を讚美す、榻にて爾を記憶し、夜更に爾を思ふ時に在り。蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。彼の我が靈を害はんことを謀る者は地の深き處に降らん、彼等刃に櫻りて、狐の獲物とならん。惟王は神の為に樂しまん、凡そ彼を以て誓ふ者は譽を得ん、蓋謊を言ふ者の口は塞がれんとす。夜更に爾を思ふ、蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に付き、爾の右の手は我を扶く。

誦經 光榮は父と子と聖神<sup>°</sup>に帰す、今も何時も世世に、「アミン」  
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に帰す。(三次)  
主憐めよ。(三次)  
光榮は父と子と聖神<sup>°</sup>に帰す、今も何時も世世に、「アミン」

誦經 第 87 聖詠

主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ、願くは我が禱は爾が顔の前に至らん、爾の耳を我が願に傾けよ、蓋我が靈は苦難に飽き、我が生命は地獄に近づけり。我は墓に入る者と等しくなり、力なき人の如くなれり、死人の中に投げられて、猶殺されて柩に臥し、爾に復記憶せられず、爾の手より絶たれし者の如し。爾我を深き坎に、闇冥に、淵に置けり。爾の憤は重く我に加はり、爾の波を傾けて我を撃てり。爾我が識る所の者を我より遠ざけ、我を彼等の惡むべき者となせり、我閉されて出づるを得ず。我が目は愁苦に因りて痛く疲れたり、主よ、我終日爾を呼び、手を伸べて爾に向へり。爾豈に死せし者に奇跡を施さんや、死せし者豈に立ちて爾を讚揚せんや、爾の憐は墓の中に、爾の眞は腐敗の地に豈に傳へられんや、爾の奇跡は闇冥に、爾の義は遺忘の地に豈に識られんや。主よ、我爾に呼ぶ、我の禱は晨に爾の前に在り。主よ、爾は何爲れぞ我が靈を棄て、爾の顔を我に隠し給ふ。我少きより禍に遭ひ、幾ど消え亡せんとし、爾の恐嚇を受けて我が疲は極れり。爾の憤は我を度り、爾の恐嚇は我を碎けり、毎日本水の如くに我を環り、齋しく集まりて我を圍む。爾は我が友と親しき者とを我より遠ざけたり、我が識る所の者は見えず。  
主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ、願くは我が禱は爾が顔の前に至らん、爾の耳を我が願に傾けよ。

第 102 聖詠

我が靈よ、主を讚め揚げよ、我が中心よ、其聖なる名を讚め揚げよ。我が靈よ、主を讚め揚げよ、彼が悉くの恩を忘るる母れ。彼は爾が諸の不法を赦し、爾が諸の疾を療す、爾の生命を墓より救ひ、憐と恵とを爾に冠らせ、幸福を爾の望に飽かしむ、爾が若復さること驚の如し。主は凡そ迫害せらるる者の為に義と審判とを行ふ。彼は己の途をモイセイに示し、己の作爲をイズライリの諸子に示せり。主は宏慈にして矜恤、寛忍にして鴻恩なり、怒りて終あり、憤を永く抱かず。我が不法に因りて我等に行はず、我が罪に因りて我等に報いず、蓋天の地より高きが如く、斯く主を畏るる者に於ける其憐は大なり、東の西より遠きが如く、斯く主は我が不法を我等より遠ざけたり、父の其子を憐むが如く、斯く主は彼を畏るる者を憐む。蓋彼は我が何より造られしを知り、我等の塵なるを記念す。人の日は草の如く、其榮ゆること田の華の如し。風之を過ぐれば無に歸し、其有りし處も亦之を識らず。唯主の憐は彼を畏るる者に世より世に至り、彼の義は其約を守り、其誠を懐ひて、之を行ふ子孫孫に及ばん。主は其實座を天に建て、其國は万物を統べ治む。主の諸の天使、能力を具へ、其聲に遵ひて其言を行ふ者よ、主を讚め

あげよ。主の<sup>ことごと</sup>悉くの軍、其<sup>その</sup>旨を行ふ<sup>えきしや</sup>役者よ、主を讃めあげよ。凡そ主の<sup>ことごと</sup>悉くの<sup>わざ</sup>造工よ、其一切<sup>その</sup>治むる<sup>ところ</sup>處に於て主を讃めあげよ。我が<sup>ほ</sup>霊よ、主を讃めあげよ。  
其一切<sup>その</sup>治むる<sup>ところ</sup>處に於て、我が<sup>ほ</sup>霊よ、主を讃めあげよ。

#### 第 142 聖詠

主よ、我が<sup>いのり</sup> 祈を<sup>ま</sup> 聆き、爾<sup>なんじ</sup>の<sup>しんじつ</sup> 眞實に依りて我が<sup>かたが</sup> 願に<sup>なんじ</sup> 耳を<sup>かたが</sup> 傾けよ、爾<sup>なんじ</sup>の<sup>なんじ</sup> 義に依りて我に<sup>なんじ</sup> 聴き給へ。  
爾<sup>なんじ</sup>の<sup>うったえ</sup> 僕と<sup>な</sup> 訟を<sup>な</sup> 為す<sup>な</sup> 母れ、<sup>けだし</sup> 蓋凡そ<sup>いのち</sup> 生命ある<sup>いつ</sup> 者は、一も<sup>なんじ</sup> 爾の前に<sup>なんじ</sup> 義とせられざらん。敵は我が<sup>お</sup> 霊を<sup>いのち</sup> 逐ひ、我が<sup>ふみにじ</sup> 生命を<sup>な</sup> 地に<sup>な</sup> 蹂り、我を<sup>くら</sup> 久しく<sup>お</sup> 死せし<sup>お</sup> 者の<sup>な</sup> 如く<sup>な</sup> 暗に<sup>な</sup> 居らしむ、我が<sup>うち</sup> 霊は<sup>な</sup> 我の<sup>な</sup> 衷に<sup>な</sup> 悶え、我が<sup>うち</sup> 心は<sup>な</sup> 我の<sup>な</sup> 衷に<sup>な</sup> 曠しきが<sup>な</sup> 如し。我<sup>いにしえ</sup> 古の<sup>な</sup> 日を<sup>な</sup> 想ひ、<sup>お</sup> 凡そ<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 行ひし<sup>な</sup> ことを<sup>な</sup> 考へ、<sup>なんじ</sup> 爾が<sup>な</sup> 手の<sup>な</sup> 工作を<sup>な</sup> 計る。我が<sup>な</sup> 手を<sup>な</sup> 伸べて<sup>なんじ</sup> 爾に向ひ、我が<sup>なんじ</sup> 霊は<sup>な</sup> 渴ける<sup>なんじ</sup> 地の<sup>な</sup> 如く<sup>な</sup> 爾を<sup>な</sup> 慕ふ。主よ、<sup>すみやか</sup> 速に<sup>なんじ</sup> 我に<sup>なんじ</sup> 聴き給へ、我が<sup>なんじ</sup> 霊は<sup>なんじ</sup> 衰へたり、<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>なんじ</sup> 顔<sup>な</sup> を<sup>な</sup> 我に<sup>な</sup> 隠す<sup>な</sup> 母れ、<sup>しから</sup> 然<sup>な</sup> ずば<sup>な</sup> 我は<sup>な</sup> 墓に入る<sup>な</sup> 者の<sup>な</sup> 如く<sup>な</sup> ならん。我に<sup>つと</sup> 夙に<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>なんじ</sup> 憐<sup>な</sup> を<sup>な</sup> 聴かしめ<sup>な</sup> 給へ、我<sup>なんじ</sup> 爾を<sup>な</sup> 頼めば<sup>な</sup> なり。主よ、我に<sup>な</sup> 行く<sup>な</sup> べき<sup>な</sup> 途を<sup>な</sup> 示し<sup>な</sup> 給へ、我が<sup>なんじ</sup> 霊を<sup>なんじ</sup> 爾に<sup>な</sup> 挙げれば<sup>な</sup> なり。主よ、我を<sup>なんじ</sup> 我が<sup>なんじ</sup> 敵より<sup>な</sup> 救ひ<sup>な</sup> 給へ、我<sup>なんじ</sup> 爾に<sup>な</sup> 趨り<sup>な</sup> 附く。我に<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 旨を行<sup>な</sup> ぶを<sup>な</sup> 教え<sup>な</sup> 給へ、<sup>なんじ</sup> 爾は<sup>な</sup> 我の<sup>な</sup> 神なれば<sup>な</sup> なり、願<sup>なんじ</sup> くは<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 善なる<sup>しん</sup> 神<sup>な</sup> は<sup>な</sup> 我を<sup>な</sup> 義の<sup>な</sup> 地に<sup>な</sup> 導かん。主よ、<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 名に<sup>な</sup> 依りて<sup>な</sup> 我を<sup>な</sup> 生かし<sup>な</sup> 給へ、<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 義に<sup>な</sup> 依りて<sup>な</sup> 我が<sup>なんじ</sup> 霊を<sup>な</sup> 苦難より<sup>な</sup> 引き出し<sup>な</sup> 給へ、<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 憐<sup>な</sup> を<sup>な</sup> 以て<sup>な</sup> 我が<sup>なんじ</sup> 敵を<sup>な</sup> 滅し、<sup>お</sup> 凡そ<sup>なんじ</sup> 我が<sup>な</sup> 霊を<sup>な</sup> 攻むる<sup>な</sup> 者を<sup>な</sup> 夷<sup>な</sup> げ<sup>な</sup> 給へ、我は<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 僕なれば<sup>な</sup> なり。  
主よ、<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 義に<sup>な</sup> 依りて<sup>な</sup> 我に<sup>なんじ</sup> 聴き<sup>な</sup> 給へ、<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 僕と<sup>な</sup> 訟<sup>な</sup> を<sup>な</sup> 為す<sup>な</sup> 母れ。  
主よ、<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 義に<sup>な</sup> 依りて<sup>な</sup> 我に<sup>なんじ</sup> 聴き<sup>な</sup> 給へ、<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 僕と<sup>な</sup> 訟<sup>な</sup> を<sup>な</sup> 為す<sup>な</sup> 母れ。  
願<sup>なんじ</sup> くは<sup>なんじ</sup> 爾の<sup>な</sup> 善なる<sup>しん</sup> 神<sup>な</sup> は<sup>な</sup> 我を<sup>な</sup> 義の<sup>な</sup> 地に<sup>な</sup> 導かん。

誦經 光榮は父と子と聖神<sup>お</sup>に帰す、今も何時も<sup>いつ</sup> 世世に、「アミン」  
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光榮は爾に帰す。(三次)

#### 【大連禱】 通常の

輔祭 我等安和にして主に<sup>な</sup> 祈らん、 (詠) 主憐めよ  
輔祭 上より降る安和と我等が<sup>すくい</sup> 霊の<sup>な</sup> 救の<sup>な</sup> 為に<sup>な</sup> 主に<sup>な</sup> 祈らん、  
輔祭 全世界の安和、神の<sup>な</sup> 聖なる<sup>な</sup> 諸教会の<sup>な</sup> 堅立、及び衆人の<sup>な</sup> 合一の<sup>な</sup> 為に<sup>な</sup> 主に<sup>な</sup> 祈らん、  
輔祭 此の<sup>な</sup> 聖堂、及び信と<sup>つつしみ</sup> 慎と<sup>な</sup> 神を<sup>な</sup> 畏るる<sup>な</sup> 心とを<sup>な</sup> 以て<sup>な</sup> 此に<sup>な</sup> 来る<sup>な</sup> 者の<sup>な</sup> 為に<sup>な</sup> 主に<sup>な</sup> 祈らん、  
輔祭 教会を<sup>な</sup> 司る<sup>な</sup> 我等の<sup>な</sup> (府) 主教 ( ), 司祭の<sup>な</sup> 尊品、ハリストスに<sup>よ</sup> 因る<sup>な</sup> 輔祭職、<sup>ことごと</sup> 悉<sup>な</sup> くの<sup>な</sup> 教衆、及び衆人の<sup>な</sup> 為に<sup>な</sup> 主に<sup>な</sup> 祈らん、  
輔祭 我が<sup>な</sup> 国の<sup>な</sup> 天皇、及び<sup>な</sup> 国を<sup>な</sup> 司る<sup>な</sup> 者の<sup>な</sup> 為に<sup>な</sup> 主に<sup>な</sup> 祈らん。  
輔祭 此の<sup>な</sup> 都邑と<sup>な</sup> 凡の<sup>な</sup> 都邑と<sup>な</sup> 地方の<sup>な</sup> 為、及び<sup>な</sup> 信を<sup>な</sup> 以て<sup>な</sup> 此の<sup>な</sup> 中に<sup>な</sup> 居る<sup>な</sup> 者の<sup>な</sup> 為に<sup>な</sup> 主に<sup>な</sup> 祈らん、  
輔祭 氣候<sup>な</sup> 順和、五穀<sup>な</sup> 豊穰、天下<sup>な</sup> 泰平の<sup>な</sup> 為に<sup>な</sup> 主に<sup>な</sup> 祈らん、  
輔祭 航海する<sup>な</sup> 者、旅行する<sup>な</sup> 者、病を<sup>うれ</sup> 患ふる<sup>な</sup> 者、艱難に<sup>な</sup> 遭ふ<sup>な</sup> 者、<sup>とりこ</sup> 虜<sup>な</sup> となりし<sup>な</sup> 者、及び<sup>な</sup> 彼等の<sup>すくい</sup> 救の<sup>な</sup> 為に<sup>な</sup> 主に<sup>な</sup> 祈らん、  
輔祭 我等<sup>もろもろ</sup> 諸の<sup>うれい</sup> 憂愁と<sup>いかり</sup> 忿怒と<sup>あやうき</sup> 危難とを<sup>な</sup> 免るる<sup>な</sup> が<sup>な</sup> 為に<sup>な</sup> 主に<sup>な</sup> 祈らん、

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を<sup>たす</sup>助け救ひ憐み護れよ、  
 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人と  
 を記憶して、我等己の身及び互に<sup>おのおの</sup>各の身を以て、並に<sup>ならび</sup>悉く<sup>ことごと</sup>の我等の生命<sup>いのち</sup>を以て、ハリ  
 ストス神に委託せん、

(詠) 主爾に

司祭 <sup>けだし</sup>蓋凡そ光栄尊貴伏拜は爾父と子と聖神<sup>いつ</sup>に帰す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

[主は神なりとトロバリ] 三歌斎経 P809 8調

輔祭 主は神なり我等を照らせり、主の名に依りて来たる者は崇め讃めらる。

(詠) 主は神なり我等を照らせり、主の名に依りて来たる者は崇め讃めらる。

輔祭 (第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、

(詠) 主は神なり我等を照らせり、主の名に依りて来たる者は崇め讃めらる。

輔祭 (第2句) 彼等我を圍み我を環れども、我主の名を以てこれを敗れり、

(詠) 主は神なり我等を照らせり、主の名に依りて来たる者は崇め讃めらる。

輔祭 (第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(詠) 主は神なり我等を照らせり、主の名に依りて来たる者は崇め讃めらる。

輔祭 (第4句) 工師が棄てし所の石は屋偶の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異  
 なりとす、

(詠) [トロバリ] 無形の者は命ぜられし事を奥密に智識に受けて、すみやかにイオシフの家に現れて、婚姻に与らざる者  
 に言へり、天を傾けて降りし主は変易なく全くして爾の内に入り給ふ。彼が爾の胎内に僕の形を受けしを見て、我驚  
 きて爾に呼ぶ、<sup>よめ</sup>聘女ならぬ<sup>よめ</sup>聘女よ、慶べ。

トロバリと主は神なり

主はかみーなり われらを照らせり、  
 主の名に依って、来たる者は崇め讃めらる

トロバリ 8調

無けいのものは命ぜられしことを奥密に受けて  
 すみやかにイオシフのいえにあらわれて  
 婚姻にあずからざる者に言えり天を傾けて降りし主は

変易なくして、全くして、爾のうちに 入りたまう  
 かれがなんじの たいない に ぼくの形を 受けしを見て  
 われおどろ きて なんじに よぶ  
 よめ 聘女ならぬ 聘女 よ、よろこ べ

カフィズマ（聖詠）省略

【小連禱】（通常の）

我等復又安和にして主に禱らん。 (詠) 主憐めよ。  
 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。 (詠) 主憐めよ。  
 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。  
 (詠) 主爾に  
 司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」

【コンダク】 三歌斎經 P810

(詠) 生神女よ、我等爾の僕婢は 禍より援けられしを以て、爾克く勝つ将帥に凱歌と感謝とを奉る、勝たれぬ權能を有つに依りて、我等を 諸の苦難より救ひ、爾を歌ひて呼ばしめ給へ、聘女ならぬ聘女よ、慶べ。

生 - 神女よ、われらなんじの ぼく 婢は  
 わざわいより 助けられしを 以って なんじ よく勝つの  
 しょうすいに 凱歌と感謝を たて - まつる  
 勝たれぬ ちからを たもつに 依って





われ等を諸々の苦難よりすくい  
 慶べよと呼ばしめたまえ  
 よめ 聘女ならぬよめよ、よろこべ

誦経 【第1イコス】 誦経 【第1イコス】 首品の天使は天より生神女に慶べよと云はん為に遣されて、  
 /此の無形の声と共に、/主よ、爾が身を取るを見て、/驚きて立ち、斯く彼に呼べり、  
 喜びの耀かんとする所以の者よ、慶べ (よ)、1  
 詛いの滅せんとする所以の者よ、慶べ (よ)。2  
 陥りしアダムを喚び起こす者よ、慶べ (よ)、3  
 エヴァの涙を拭ふ者よ、慶べ (よ)。4  
 人の意念おもいの登り難きたかさ巍崇よ、慶べ (よ)、1  
 天使の目にも見難きふかき深邃よ、慶べ (よ)。2  
 王の座たるに因りて慶べ (よ)、3  
 万物を載する者を載するに因りて慶べ (よ)。4  
 日を頭す星よ、慶べ (よ)、1  
 神が身を取る腹よ、慶べ (よ)。2  
 造物の新たにせらるる所以の者よ、慶べ (よ)、3  
 我等が造物主に伏拜する所以の者よ、慶べ (よ)。4

(詠) よめ 聘女ならぬ よめ 聘女よ、慶べ。



リフレイン  
 よめ 聘女ならぬ よめや、よろこべーよ

誦経 【第2コンダク】 聖なる者は己の潔淨を見て、毅然としてガウリイルに言ふ、爾が告ぐる所の  
 奇異なる事は我が霊の為に受け難く現る、蓋し爾は如何ぞ種なきはらみ降孕の産の事を言ひて呼  
 ぶ、アイルイヤ

(詠) アイルイヤ、アイルイヤ、アイルイヤ



リルイン  
 アイルイヤ、アイルイヤ、アイルイヤ

誦経 【第2イコス】童貞女は悟られぬ<sup>おうひ</sup>奥秘を悟らんと欲して、奉事する者に呼べり、／潔淨の胎より如何ぞ子の生るるあらん、／我に言へ／彼は<sup>おそれ</sup>畏を以て斯く是に呼びて云へり、言ひ難き議定の秘密者よ、慶べ（よ）、1  
 黙念を要する奥義を信ずる者よ、慶べ（よ）。2  
 ハリストスの奇跡の始よ、慶べ（よ）、3  
 彼の教の首要なる者よ、慶べ（よ）。4  
 神の<sup>くだ</sup>降りたる天の<sup>かけはし</sup>梯よ、慶べ（よ）、1  
 地上の者を天に度す橋よ、慶べ（よ）。2  
 天使の<sup>おおい</sup>大に栄する奇跡よ、慶べ（よ）、3  
 諸悪鬼の大いに悲しむ<sup>いたみ</sup>痛傷よ、慶べ（よ）。4  
 言ひ難く光を生みし者よ、慶べ（よ）、1  
 何如にと何人にも教へざりし者よ、慶べ（よ）、2  
 睿智者の智慧に超ゆる者よ慶べ（よ）。3  
 信者の智識を照す者よ、慶べ（よ）。4

（詠）聘女ならぬ聘女よ、慶べ。

誦経 【第3コンダク】其時至上者の能は婚姻に与らざる者を<sup>はらみ</sup>妊孕の為に<sup>おほ</sup>蔭ひ、其胎を甘美なる田の如く、凡そ救を刈らんと欲する者の為に善き実を結ぶ者と為して、彼等に斯く呼ばしむ、ア ril l i ya

（詠）ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya

誦経 【第3イコス】童貞女は神を受けし胎を<sup>たも</sup>有ちて、エリサベタの許に上りしに、其の<sup>はらみご</sup>胎兒は／直に彼の安を問ふを知りて、喜び躍りて、歌を以てするが如く／生神女に呼べり、枯れざる枝の芽よ、慶べ（よ）、1  
 不死の果を獲たる者よ、慶べ（よ）。2  
 仁愛なる農夫を出す者よ、慶べ（よ）、3  
 我が生命の栽培者を生む者よ、慶べ（よ）。4  
 慈憐の豊なるを生ずる<sup>はた</sup>疇よ、慶べ（よ）、1  
 潔淨の充満を載する案よ、慶べ（よ）。2  
 樂園を繁栄せしむるに因りて慶べ（よ）、3  
 霊の為に港を設くるに因りて慶べ（よ）。4  
 祈禱の嘉く納れらるる香烟よ、慶べ（よ）、1  
 全世界の潔淨よ、慶べ（よ）。2  
 死すべき者に対する神の恵よ、慶べ（よ）、3  
 神に対する死すべき者の<sup>いさみ</sup>勇敢よ、慶べ（よ）。4

（詠）聘女ならぬ聘女よ、慶べ。

誦経 【第4コンダク】無玷<sup>むてん</sup>なる者よ、貞潔なるイオシフは婚姻せざる爾を見て、<sup>ひそか</sup>竊に婚姻をしたりと思ひて、己の内に疑の思の<sup>あらし</sup>暴風を抱きて、心<sup>みだ</sup>擾れたり、然れども爾が<sup>はらみ</sup>聖神<sup>°</sup>に由る懷孕を

知りて云へり、アリルイヤ

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

(詠) [コンダク] 生神女よ、我等爾の奴婢は<sup>わがわい</sup>禍より援けられしを以て、爾克<sup>よ</sup>く勝つ<sup>しょうすい</sup>将帥に凱歌と感謝とを奉る、勝たれぬ<sup>ちから</sup>権能<sup>たも</sup>を有つに依りて、我等を<sup>もろもろ</sup>諸の苦難より救ひ、爾を歌ひて呼ばしめ給へ、<sup>よめ</sup>聘女ならぬ<sup>よめ</sup>聘女よ、<sup>よろこ</sup>慶べ。<楽譜7頁を見よ>

誦経 [ネポロチニ] (118 聖詠) 道に玷なきもの

【小連禱】

我等復又安和にして主に禱らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」

(詠) [コンダク] 生神女よ、我等爾の奴婢は<sup>わがわい</sup>禍より援けられしを以て、爾克<sup>よ</sup>く勝つ<sup>しょうすい</sup>将帥に凱歌と感謝とを奉る、勝たれぬ<sup>ちから</sup>権能<sup>たも</sup>を有つに依りて、我等を<sup>もろもろ</sup>諸の苦難より救ひ、爾を歌ひて呼ばしめ給へ、<sup>よめ</sup>聘女ならぬ<sup>よめ</sup>聘女よ、<sup>よろこ</sup>慶べ。<楽譜7頁を見よ>

誦経 [第4イコス] 牧者は天使等がハリストスの肉体に於ける降臨を歌ふを聞きて、／之に牧師に於けるが如く急ぎ来りて、／其無垢なる羔の如くマリヤの腹に養はれしを見て、／歌ひて云へり、

<sup>こひつじ</sup>羔及び牧師の母よ、慶べ(よ)、1

靈智なる羊の<sup>おり</sup>牢よ、慶べ(よ)。2

見えざる敵を防ぐ者よ、慶べ(よ)、3

樂園の門を啓く者よ、慶べ(よ)。4

天の者が智の者と偕に喜ぶに因りて慶べ(よ)。1

地の者が天の者と偕に楽しむに因りて慶べ(よ)。2

使徒等の黙さざる口よ、慶べ(よ)。3

受難者の勝たれぬ<sup>いさみ</sup>勇敢よ、慶べ(よ)。4

信の堅固なる<sup>かため</sup>保固よ、慶べ(よ)、1

恩寵の輝ける<sup>しるし</sup>印章よ、慶べ(よ)。2

地獄の剥がれたる所以の者よ、慶べ(よ)、3

我等が光榮を衣せられたる所以の者よ、慶べ(よ)。4

(詠) <sup>よめ</sup>聘女ならぬ<sup>よめ</sup>聘女よ、慶べ。

誦経 【第5コンダク】博士は神妙に行く星を見て、其光に従ひ、之を燈の如く執りて、此に由りて  
権能の王を尋ね、詣り難き者に詣りて、歡びて彼に呼べり、ア ril l i ya

(詠) **ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya**

誦経 【第5イコス】ハルデヤの諸子は／童貞女の手<sup>いた</sup>に人を其手にて造りし者を見て／彼が僕の形を  
受けたりと雖<sup>いえども</sup>主宰たるを悟りて／熱切に之に礼物を奉りて、祝福せられし者に呼べり、  
没せざる星の母よ、慶べ (よ)、1

奥密の日の暁よ、慶べ (よ)。2

迷の爐<sup>いろり</sup>を滅しし者よ、慶べ (よ)、3

聖三者の秘密者を照らす者よ、慶べ (よ)。4

残忍なる暴虐者の権を空しくする者よ、慶べ (よ)、1

仁愛なる主ハリストスを躪しし者よ、慶べ (よ)。2

偶像の役事より積く者よ、慶べ (よ)、3

悪業の滓<sup>ひじ</sup>より出すものよ、慶べ (よ)。4

火の敬拜を滅せし者よ、慶べ (よ)、1

諸愆の燄<sup>ほのお</sup>より救ふ者よ、慶べ (よ)。2

信者を貞潔に導く者よ、慶べ (よ)、3

万族の楽しみよ、慶べ (よ)。4

(詠) **よめ ならぬ よめ 女よ、慶べ。**

誦経 【第6コンダク】捧神なる伝道師と為りし博士は爾に関する預言<sup>かな</sup>を応はせ、衆に爾ハリストス  
を伝えて、バビロンに帰り、イロドを虚言の者として遺せり、蓋彼は歌ふを知らざりき、  
ア ril l i ya

(詠) **ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya**

誦経 【第6イコス】救世主よ、爾は／エギペトに真実の光を耀かして、偽<sup>くらやみ</sup>の幽暗を逐ひ給へり、／  
蓋彼處の偶像は爾の力に勝へずして墜ちたり。／此等より救はれたる者は生神女に呼べり、  
人々の矯正<sup>あらため</sup>よ、慶べ (よ)、1

悪鬼の傾倒<sup>たおれ</sup>よ、慶べ (よ)。2

誘惑<sup>いざない</sup>の権を踐みたる者よ、慶べ (よ)、3

偶像の虚誕<sup>いつわり</sup>を躪しし者よ、慶べ (よ)。4

無形のファラオンを溺らしし海よ、慶べ (よ)、1

生命に渴く者に飲ませし石よ、慶べ (よ)。2

幽暗<sup>くらやみ</sup>に在る者を導く火の柱よ、慶べ (よ)、3

雲より広き世界の帡幪<sup>おおい</sup>よ、慶べ (よ)。4

「マンナ」に続く糧よ、慶べ (よ)、1

聖なる甘味を頷かつ者よ、慶べ（よ）、2

許役の地よ、慶べ（よ）、3

蜜と乳とを流す者よ、慶べ（よ）。4

〔詠〕 聘女ならぬ聘女よ、慶べ。

誦経 【第7コンダク】シメオンは今の迷の世より移らんとせしに、爾は赤子として彼に与へられたり、然れども彼に亦完全なる神として知られたり。故に彼は爾の言ひ難き睿智を奇として呼べり、ア ril イヤ

〔詠〕 ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ

〔詠〕 【コンダク】生神女よ、我等爾の僕婢は「禍」より援けられしを以て、爾克く勝つ將帥に凱歌と感謝とを奉る、勝たれぬ權能を有つに依りて、我等を「諸」の苦難より救ひ、爾を歌ひて呼ばしめ給へ、聘女ならぬ聘女よ、慶べ。〈楽譜7頁を見よ〉

誦経 第50 聖詠 神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み、爾が恵の多きに因りて我の不法を抹し給へ。屢我を我が不法より洗ひ、我を我が罪より清め給へ、蓋我は我が不法を知る、我の罪は常に我が前に在り。我は爾独爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に行へり、爾は爾の審断に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾は心に真実のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯せり。「イソプ」を以て我に沃げ、然せば我潔くならん、我を滌へ、然せば我雪より白くならん。我に喜と樂とを聞かせ給へ、然せば爾に折られし骨は悦ばん。爾の顔を我が罪より避け、我が盡くの不法を抹し給へ。神よ、潔き心を我に造れ、正しき霊を我の衷に改め給へ。我を爾の顔より逐ふこと母れ、爾の聖神を我より取り上ぐる事母れ。爾が救の喜を我に還せ、主宰たる神を以て我を固め給へ。我不法の者に爾の道を教へん、不度の者は爾に帰らんとす。神よ、我が救の神よ、我を血より救ひ給へ、然せば我が舌は爾の義を讃め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げん、蓋爾は祭を欲せず、欲せば我之を獻らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の靈なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給はず。主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給え、其時に爾義の祭、獻物と燔祭とを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠へんとす。

司祭 神よ、爾の民を救ひ、及び爾の嗣業に福を降し給へ、慈憐と洪恩とを以て爾の世界に臨み、正教の「ハリストティアニン」等の角を高うし、我等に爾の豊なる憐を垂れ給へ、至浄なる我等の女宰・生神女・永貞童女マリヤの禱と、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光榮なる尊き預言者・前驅・授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、我等の聖神°父・世界の教師・成聖者・大ワシリイ、神学者グリゴリイ、金ロイオアン、我等の聖神°父・ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神°父・全ロシアの奇蹟者ペトル、アレキシイ、イオナ、フィリップ、光榮なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神°父、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、聖〇〇（本堂の聖人の名

を挙ぐ) 及び 悉くの聖人の転達に因りて、大仁慈の主よ、爾に求む、我等罪人爾に禱る者に聆き納れて、我等を憐れめよ。

(詠) 主憐めよ(十二次)

司祭 爾が独生子の仁慈と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神<sup>と</sup>と偕に讃揚せらる、今も何時も世世に。(詠) 「アミン」

## カノン

第1のカノン4調、第2のカノン6調、第3のカノン5調 三歌斎経 P814 <sup>1</sup>

### 第1歌頌

(詠) イルモス4調「我が口を開きて、聖神<sup>に</sup>に満てられ、言を女王母に奉り、楽しみ祝ひ、喜びて其の奇蹟を歌はん」

第1歌頌

我が口をひらきて、 聖-神<sup>に</sup>に満てら-れ、

言を女王母にたてまつり、 たのしみ いわ-い、

慶びてその奇蹟を うた-わん。

誦経 **【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。**

潔き者よ、大なる天使首は爾をハリストスの活ける書、聖神に印せられし者と見て、爾に呼べり、喜を受くる器、原母の誼の之に由りて積かるべき者よ、慶べ。

**【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。**

アダムの更新、地獄の滅亡なる童貞女、神の聘女よ、慶べ。萬有の王の宮たる純潔の者よ、慶べ、全能者の火の状の宝座よ、慶べ。

**【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。**

萎まざる花、独芳ばしき果を結びし者よ、慶べ。唯一の王の馨香を生ぜし者よ、慶べ、世界の救たる婚姻に与らざる者よ、慶べ。

**【冠詞】光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。**

潔淨の宝蔵、我等が墮落より起きたる所以の者よ、慶べ。香気を放つ百合の花、信者を馨らしむる女宰、香ばしき香爐、値貴き香料よ、慶べ。

~~(詠) イルモス4調「我が口を開きて、聖神<sup>に</sup>に満てられ、言を女王母に奉り、楽しみ祝ひ、喜びて~~

<sup>1</sup> 規定どおりに行うとすれば、1から5歌頌までは堂の聖人のカノン+下記の生神女のカノン。イルモス2回も込みで12段に。生神女に献じられた聖堂の場合は、生神女のカノンのみで12段に。カリストスウエア主教の The Lenten Triodion によれば、生神女の聖堂の場合は下記のカノンの各トロバリを2回ずつ歌い、12段とする。附唱は「至聖なる生神女や我等を救い給へ。」6歌頌以降は、聖人のカノンは省き、三歌斎経の生神女の二つのカノンで12段になるように構成する。ただし、ここでは、聖人のカノンは省略。イルモスは1回のみ、で構成した。もともとは旧約歌頌の間に挿入されていた。

其の奇跡を歌はん」

第3歌頌

(詠) イルモス4調「生神女、生活にして盡きざる泉よ、祝ひて爾を讃め歌ふ者の霊を固め、彼等に爾が神妙なる  
光栄の中に栄冠を冠らしめ給へ」

第3歌頌

生 - 神 - 女 生 - 活 に し て 尽 き ざ る い ず み や、  
 祝 う て 爾 を 讃 め 歌 う 者 の 霊 を か た め、  
 彼 等 に 爾 が 神 妙 な る 光 栄 の う ち に、  
 栄 冠 を 被 ら せ た ま - え。

誦経 【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。

耕作せられざる地にして神聖なる穂を生ぜし者、生命の餅を載する活ける案よ、慶べ。生活の水の盡きざる泉たる女宰よ、慶べ。

【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。

無\*てんなる犢を信者の為に生みたる牝牛よ、慶べ、全世界の罪を任ふ神の羔を生みたる牝羊よ、慶べ。熱切なる潔浄よ、慶べ。

【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。

光明なる朝、独日たるハリストス、光の居處を載する者よ、慶べ。暗を解き、昏き悪鬼を逐ひ盡したる者よ、慶べ。

【冠詞】光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

独の言の過りし独の門、爾の産を以て地獄の柱と門とを壊ちし女宰よ、慶べ。救はるる者の神聖なる入門たる神の聘女よ、慶べ。

共頌、生神女、生活にして盡きざる泉よ、祝ひて爾を讃め歌ふ者の霊を固め、彼等に爾が神妙なる  
光栄の中に栄冠を冠らしめ給へ。

【小連禱】 (通常の)

我等復又安和にして主に祷らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」

(詠) 【コンダク】生神女よ、我等爾の僕婢は<sup>わづかい</sup>禱より援けられしを以て、爾克く勝つ<sup>しやうすい</sup>將帥に凱歌と感謝とを奉る、勝たれぬ<sup>まから</sup>權能を有つに依りて、我等を<sup>もろもろ</sup>諸の苦難より救ひ、爾を歌ひて、呼ばしめ給へ、聘女ならぬ<sup>よめ</sup>聘女よ、慶べ。

誦經 【第7イコス】造物主は我等彼に由りて造られし者に現れて、／新たなる造物を示し給へり。／蓋種なき胎より生じて、之を元のまま不朽の者と護れり、／我等が奇跡を見て、之を歌ひて呼ばん為なり、

不朽の花よ、慶べ (よ)、1

節制の榮冠よ、慶べ (よ)。2

光明に復活を形る者よ、慶べ (よ)、3

天使の度生を顕す者よ、慶べ (よ)。4

<sup>うるわ</sup>美しき実を結ぶ樹、信者の之に由りて養はるる者よ、慶べ (よ)、1

蔭の繁き樹、衆くの者の其の下に蔽はるる者よ、慶べ (よ)。2

<sup>とりこ</sup>俘虜を積く者を<sup>はら</sup>孕みし者よ慶べ (よ)、3

迷へる者の<sup>きやうどうしや</sup>嚮導者を生みし者よ、慶べ (よ)。4

義なる審判者に轉達する者よ、慶べ (よ)、1

多くの罪の<sup>ゆるし</sup>赦免よ、慶べ (よ)。2

裸体者の<sup>いさみ</sup>勇敢の衣よ、慶べ (よ)、3

凡ての望に超ゆる愛よ、慶べ (よ)。4

(詠) 聘女ならぬ聘女よ、慶べ。

誦經 【第8コンダク】我等は奇異なる産を見て、智慧を世より離して天に移さん、蓋至高き神が地上に謙卑なる人と現れしは、殊に彼に呼ぶ者を高きに登せんと欲したればなり、ア ril l i y a

(詠) ア ril l i y a、ア ril l i y a、ア ril l i y a

誦經 【第8イコス】形どられぬ言は全くして下に在り、亦全くして上に離れざりき、／蓋成りたることは處所<sup>ところ</sup>の変遷に在らずして、／神聖なる謙遜と神を孕みし童貞女よりの降誕なり。／故に我等之に呼ばん、

容れられぬ神の容處<sup>いれどころ</sup>よ、慶べ (よ)、1

尊き奥密の門よ、慶べ (よ)。2

不信者の疑わしき風聞よ、慶べ (よ)、3

信者の確かなる誇よ、慶べ (よ)。4

ヘルビムの上に居る者の至聖なる<sup>くるま</sup>輅よ、慶べ (よ)、1

セラフィムの上に居る者の至榮なる居處<sup>すまい</sup>よ、慶べ (よ)。2

攻敵する者を一に集めたる者よ、慶べ (よ)、3



童貞と生産とを合せし者よ、慶べ（よ）。4

犯罪の積かれたる所以の者よ、慶べ（よ）、1

楽園の開かれたる所以の者よ、慶べ（よ）。2

ハリストスの国の鑰よ、慶べ（よ）、3

永遠の福の恃頼よ、慶べ（よ）。4

**(詠)** 聘女ならぬ聘女よ、慶べ。

誦経 【第9コンダク】凡その天使の性は爾が人と為りし大なる事に驚きたり、蓋神として近づき難き者を衆に近づき易く、我等と偕に居り、衆に歌はるる人として見たり、

**(詠)** アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

誦経 【第9イコス】生神女よ、我等は多言なる弁舌家を爾の前に／魚の如く無言なる者と見る、蓋彼等は如何に爾が／童貞女に止まりて生むことを得たるを述ぶるに惑ふ。／惟我等は奥密を奇として、信を以て呼ぶ、

神の睿智の器よ、慶べ（よ）、1

彼の思慮の宝蔵よ、慶べ（よ）。2

智識を誇る者を無智者と顕す者よ、慶べ（よ）。3

能弁者を無言者と為す者よ、慶べ（よ）。4

非理なる研究者の無能なるに因りて慶べ（よ）、1

虚説を作る者の衰へたるに因りて慶べ（よ）。2

アフィニの編み物を裂く者よ、慶べ（よ）、3

漁者の網を切つる者よ、慶べ（よ）。4

無智の深處より、引き出す者よ、慶べ（よ）、1

許多の智識を照らす者よ、慶べ（よ）。2

救を望む者の舟よ、慶べ（よ）、3

生命の海を渡る者の港よ、慶べ（よ）。4

**(詠)** 聘女ならぬ聘女よ、慶べ。

誦経 【第10コンダク】飾る主は世界を救はんと欲して、己の許約に由りて此に來たり、牧者として神は我等の為に我等に似たる人と現れ給へり、蓋同じき者を以て同じき者を召して神として聴く、

**(詠)** アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

**(詠)** 【コンダク】生神女よ、我等爾の僕婢は禍より援けられしを以て、爾克く勝つ將帥に凱歌と感謝とを奉る、勝たれぬ權能を有つに依りて、我等を諸の苦難より救ひ、爾を歌ひて呼ばしめ給へ、聘女ならぬ聘女よ、慶べ。

[セダレン] 1調

誦経 潔き生神女よ、無形の天使等の大なる軍將はナザレトの邑に現れて、爾の王及び世世の主を爾に報じて云ふ、祝福せられしマリヤ、悟り難く言ひ難き深邃、人々の喚起よ、慶べ。

光栄は父と子と聖神<sup>o</sup> に帰す、今も何時も世々にアミン。

#### 第4歌頌

(詠) イルモス4調「光栄の中に神性の宝座に坐するイイスス神は、軽き雲に乗るが如く、朽ちざる手に抱かれ来たりて、ハリストスよ、光栄は爾の力に帰すと呼ぶ者を救ひ給へり。」

第4歌頌



光 - 栄のうちに 神性の宝座に坐するイイス - ス かみは、  
かるき雲に乗るが ごと - く、  
朽ちざるの手に抱かれ 来たりて、  
ハリストス や、光栄は爾の力に帰すと呼ぶ者を救いたまえり。

誦経

〔冠詞〕喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。

讚美たる童貞女よ、我等は歌の声を以て爾に呼ぶ、繋くして聖神に霑されたる山よ、慶べ。燈台よ、慶べ、衆敬虔者の感覚を楽しましむる「マンナ」を容るる壺よ、慶べ。

〔冠詞〕喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。

世界の潔浄たる至りて潔き女宰よ、慶べ。恩寵を以て週を地より上らしむる梯よ、慶べ。爾を歌ふ衆人を実に死より生に度す橋よ、慶べ。

〔冠詞〕喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。

天より最高き者、爾の胎内に輒く地の基を容れし至浄なる童貞女よ、慶べ。爾の血を以て萬軍の王の為に神聖なる緋袞衣を染めし臙脂よ、慶べ。

〔冠詞〕喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。

真の立法者、衆人の不法を功なくして潔むる主を生みし女宰、測られう深邃、言ひ難き巍崇、婚姻に與らざる童貞女、我等が神成せられし所以の者よ、慶べ。

〔冠詞〕光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

童貞女よ、我等は爾世界の為に手にて編まれざる栄冠を編みし者を歌頌して呼ぶ、衆人の守護と垣牆、防固と聖にせられし避所よ、慶べ。

共頌、光栄の中に神性の寶座に坐するイイスス神は、軽き雲に乗るが如く、朽ちざる手に抱かれ来りて、ハリストスよ、光栄は爾の力に帰すと呼ぶ者を救ひ給へり。

## 第5歌頌

(詠) イルモス4調「萬物は爾が神妙の光榮に驚かざるなし、爾婚配を識らざる童貞女は至上の神を孕み、永遠の子を生みて、凡そ爾を歌ふ者に平安を給へばなり。」

第5歌頌



萬物は 爾が神妙の光榮に 驚かざる なし、  
爾 婚配こんぱいを知らざる童貞女は 至上の神を はら - み、  
永遠の子を生みて、  
凡そ爾ほを讃め歌う者に 平安を賜えばな - り。

誦經 【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。

いのち生命の道を生みて、世界の罪を洪水より救ひし無玷の者よ、慶べ。神の聘女、畏るべき声聞及び語言よ、慶べ、造物の主宰の居處よ慶べ。

【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。

人人の力及び固、光榮なる成聖の庭、地獄の滅亡、輝ける宮たる至りて潔き者よ、慶べ。天使等の歡喜よ慶べ、信を以て爾に祈る者の扶助よ、慶べ。

【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。

言の火の状の車たる女宰よ、慶べ。活ける樂園よ、慶べ、其中に生命の樹たる主ありて、彼の甘味は信を以て之を味ひ、先に朽壞に服せし者を活かす。

【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。

我等爾の力に堅められて、熱心に爾に呼ぶ、萬有の王の城邑よ、慶べ、光榮の事は爾に於て伝へられたり。裁られざる山よ、慶べ、測られざる深邃よ、慶べ。

【冠詞】光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

言の広き居處たる至浄なる生神女よ慶べ、神聖なる真珠を生みし真珠貝よ、慶べ。凡そ爾を常に讚美する者の神に於ける奇異なる和睦よ、慶べ。

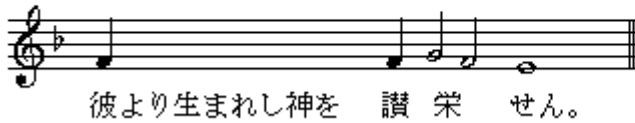
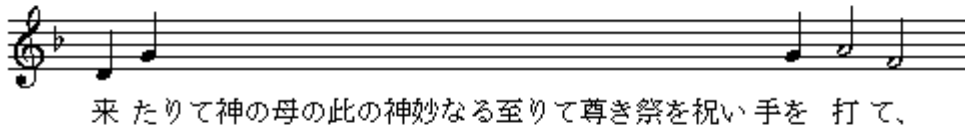
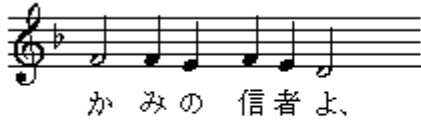
共頌、萬物は爾が神妙の光榮に驚かざるなし、爾婚配を識らざる童貞女は至上の神を孕み、

永遠の子を生みて、凡そ爾を歌ふ者に平安を賜へばなり。

(此に至りて堂の聖人の規程を終える)。

第6歌頌 第1のカノン 第4調

(詠) イルモス4調「神の信者よ、来たりて神の母の」



誦経 [冠詞] 喜びの器よ、獨爾に喜ぶことはかなう。

言の無玷なる宮、衆の神成せらるる所以なる至りて潔き者よ、慶べ。諸預言者の伝、使徒等の誉よ、慶べ。

[冠詞] 喜びの器よ、獨爾に喜ぶことはかなう。

童貞女よ、爾より多神の\*ほのほを滅す露は滴りたり。故に我等爾に呼ぶ、活ける羊の毛、ゲデオンの預見せし者よ、慶べ。

[冠詞] 喜びの器よ、獨爾に喜ぶことはかなう。

見よ我等爾に慶べよと呼ぶ。童貞女よ、我等患難と衆人の敵の誘惑との海に荒らさるる者の為に穩なる港と為り給へ。

[冠詞] 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

歡喜の所以なる者よ、我等の思に恩寵を降して、爾に呼ばしめ給へ、焚かれぬ棘、常に信者を蔽ふ光明なる雲よ、慶べ。

<第2のカノン、第3のカノン省略>

[小連禱] (通常の)

我等復又安和にして主に禱らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。(詠)「アミン」

(詠) [コンダク] 生神女よ、我等爾の僕婢は禍より援けられしを以て、爾克く勝つ將帥に凱歌と感謝とを奉る、勝たれぬ權能を有つに依りて、我等を諸の苦難より救ひ、爾を歌ひて呼ばしめ給へ、聘女ならぬ聘女よ、慶べ。

誦経 【第10イコス】至浄なる生神童貞女よ、／爾は童貞女及び凡そ爾に趨り附く者の為に垣牆<sup>かき</sup>なり。  
 ／蓋天地の造成者は爾の胎内に居りて、斯く爾を造り、／且衆に教へて爾に呼ばしむ、  
 童貞の柱よ、慶べ（よ）、1  
 救の門よ、慶べ（よ）。2  
 心霊の再興の所以の者よ、慶べ（よ）、3  
 神聖なる仁善を與ふる者よ、慶べ（よ）。4  
 不法に於いて妊まれたる者を新たにせしに由りて慶べ（よ）、1  
 智慧の乏しき者を教へしに由りて慶べ（よ）。2  
 意念<sup>いねん</sup>の破壊者を空しくする者よ、慶べ（よ）、3  
 潔浄を播く主を生みし者よ、慶べ（よ）。4  
 種なき婚姻の宮よ、慶べ（よ）、1  
 信者を主に配合せし者よ、慶べ（よ）。2  
 童貞女の善良なる教育者よ、慶べ（よ）、3  
 聖なる霊を聘女として主に携ふる者よ、慶べ（よ）。4

**(詠) 聘女<sup>よめ</sup>ならぬ聘女<sup>よめ</sup>よ、慶べ。**

誦経 【第11コンダク】聖なる王よ、凡の歌爾の洪恩の大数を述べんと欲する者は之を盡くす能はず。蓋し我等若し砂<sup>まきご</sup>の数の如き歌を爾に捧ぐとも、爾が我等に賜ひし諸恩に適ふことを一も行はず、故に爾に呼ぶ、ア ril イヤ

**(詠) ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ**

誦経 【第11イコス】我等は聖なる童貞女を幽暗<sup>くらやみ</sup>に在る者に現れたる輝ける燈<sup>ともしび</sup>と見る、／蓋彼は無形の火を燃やして、其の輝煌<sup>かがやき</sup>を以て衆の智慧を照らして、／神聖なる智識に導く。／故に衆は彼を尊みて斯く呼ぶ、  
 無形の火の光線よ、慶べ（よ）、1  
 暮れざる光の輝煌<sup>かがやき</sup>よ、慶べ（よ）。2  
 霊を照らす電<sup>いなずま</sup>よ、慶べ（よ）、3  
 雷の如く敵を畏れしむる者よ、慶べ（よ）。4  
 大いなる光の光照を輝かすに因りて慶べ（よ）、1  
 多水の川を流すに因りて慶べ（よ）。2  
 洗盤の型を画す者よ、慶べ（よ）、3  
 罪の汚れを除く者よ、慶べ（よ）。4  
 良心を滌ふ盤よ、慶べ（よ）、1  
 歓楽を斟む爵よ、慶べ（よ）。2  
 ハリストスの馨香<sup>けいこう</sup>の馥氣<sup>かおり</sup>よ、慶べ（よ）、3  
 奥密の歓楽<sup>いのち</sup>の生命よ、慶べ（よ）。4

**(詠) 聘女<sup>よめ</sup>ならぬ聘女<sup>よめ</sup>よ、慶べ。**

誦経 【第12コンダク】衆人の罪債<sup>おにいめ</sup>を解く主は古の罪債<sup>おにいめ</sup>を赦す恩寵を賜はんと欲して、親ら彼の恩

寵に離れたる者に來たり、書券を裂きて衆より聴き給ふ、アリルイヤ

(詠) **アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ**

誦経 【第12イコス】 生神女よ、我等皆爾の産を歌ひて、／爾を活ける殿として讃め揚ぐ。／蓋萬物を其の手に持つ主は爾の腹に居りて、／爾を聖にし、爾を榮し、衆に爾に呼ばんことを教へ給へり、

神及び言<sup>ことば</sup>の住所よ、慶べ (よ)、1

至聖所より高き者よ、慶べ (よ)。2

聖神<sup>ひつ</sup>にて金装せられたる匱よ、慶べ (よ)、3

生命<sup>いのち</sup>の盡くされぬ宝蔵よ、慶べ (よ)。4

虔誠なる諸王の尊貴なる榮冠よ、慶べ (よ)、1

敬虔なる諸司祭の貴き譽よ、慶べ (よ)。2

教会の動かされぬ柱よ、慶べ (よ)、3

国の壊られぬ牆よ、慶べ (よ)。4

勝利の旗の挙げらるる所以の者よ、慶べ (よ)、1

敵の墜さるる所以の者よ、慶べ (よ)。2

吾が体の醫治<sup>いやし</sup>よ、慶べ (よ)、3

吾が靈の救よ、慶べ (よ)。4

(詠) **聘女<sup>よめ</sup>ならぬ聘女<sup>よめ</sup>よ、慶べ。**

誦経 【第13コンダク】 嗚呼讚美たる母、衆聖者より最聖なる言を生みし者よ、今奉獻を受けて爾に呼ぶ、衆人を凡その禍より救ひ、及び将来の苦しみより脱れしめ給へ、アリルイヤ

(詠) **アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ**

誦経 【第1イコス】 首品の天使は天より生神女に慶べよと云はん為に遣されて、／此の無形の声と共に、／主よ、爾が身を取るを見て、／驚きて立ち、斯く彼に呼べり、

喜びの耀かんとする所以の者よ、慶べ (よ)、1

詛いの滅せんとする所以の者よ、慶べ (よ)。2

陥りしアダムを喚び起こす者よ、慶べ (よ)、3

エヴァの涙を拭ふ者よ、慶べ (よ)。4

人の意念<sup>おもい</sup>の登り難き巍崇<sup>たかさ</sup>よ、慶べ (よ)、1

天使の目にも見難き深邃<sup>ふかよ</sup>よ、慶べ (よ)。2

王の座たるに因りて慶べ (よ)、3

万物を載する者を載するに因りて慶べ (よ)。4

日を顯す星よ、慶べ (よ)、1

神が身を取る腹よ、慶べ (よ)。2

造物の新たにせらるる所以の者よ、慶べ (よ)、3

我等が造物主に伏拜する所以の者よ、慶べ (よ)。4

(詠) **聘女<sup>よめ</sup>ならぬ聘女<sup>よめ</sup>よ、慶べ。**

(詠) [コンダク] 生神女よ、我等爾の僕婢は禍より援けられしを以て、爾克く勝つ將帥に凱歌と感謝とを奉る、勝たれぬ權能を有つに依りて、我等を諸の苦難より救ひ、爾を歌ひて呼ばしめ給へ、聘女ならぬ聘女よ、慶べ。

**第7歌頌** 第1のカノン 第4調

(詠) イルモス4調「敬虔の者は造物主に易へて造物に事ふることをせざりき、火の嚇しを勇ましく踏みて、喜び歌へり、讚美たる主、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる」

第7歌頌

敬虔の者は造物主にかえて、造物につかえず、  
火の脅しを勇ましく踏みて慶びうたえり、  
讚美たる主 先祖のかみや、爾は崇め讃めらる。

誦経 **【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。**

我等爾を歌頌して呼ぶ、無形の日の輅よ、慶べ。熟したる葡萄の房、信を以て爾を讚榮する人人の靈を楽しまする酒を流す者を生ぜし真の葡萄の樹よ、慶べ。

**【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。**

衆人の医師を生みし神の聘女よ、慶べ。凋まざる花を発きたる奥密の杖たる女宰よ、慶べ、我等は爾に由りて喜に満たされて生命を續ぐ。

**【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。**

女宰よ、能弁の舌も爾を歌頌する能はず、蓋爾はハリストス王を生みて、セラフィムより高き者と爲れり。此の邑が諸の災厄より救はれんことを彼に祈り給へ。

**【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。**

生神女よ、四極は爾を讚美讚揚して、愛を以て爾に呼ぶ、父の指にて言の録されたる巻軸なる至浄の者よ、慶べ。爾の諸僕が生命の書に録されんことを彼に祈り給へ。

**【冠詞】光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。**

生神女よ、我等爾の諸僕は祈りて吾が心の膝を屈む。潔き者よ、爾の耳を傾けて、諸の憂に沈めらるる我等を救ひて、爾の邑を凡の敵の攻撃より護り給へ。

<第2のカノン、第3のカノン省略> 第6調

**第8歌頌** 第1のカノン 第4調

(詠) イルモス4調「生神女の産は敬虔の少者を爐の中に守れり、その時に預め徴され、今日に應ひし此の産は全世界に勤めて爾に歌はしむ、造物は主を歌ひて、萬世に彼を讃め揚げよ」

第8歌頌

生神女の産は、敬献しょうけんの少者しょうしやを炉いろりのうちにまもれり、  
 その時あらかじめ記るされ、今既にかないしこの産は  
 全世界にすすめて爾に歌わしむ、  
 造物は主をうたうて、世世に讃め揚げよ。

〔冠詞〕喜びの器よ、獨爾に喜ぶことはかなう。

潔き者よ、爾は言を胎内に受け万物を持つ主を抱き其指磨にて全地を養ふ者を乳にて養ひ給へり。我等は彼に歌ふ、造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

〔冠詞〕喜びの器よ、獨爾に喜ぶことはかなう。

至潔至聖なる童貞女よ、モイセイは爾の産の大なる秘密を棘の中に悟り、少者は焚かれずして火の中に立ちて、最明に之を預象せり。故に我等は萬世爾を尊む。

〔冠詞〕喜びの器よ、獨爾に喜ぶことはかなう。

光の居處たる少女よ、我等先に誘惑に由りて裸体にせられし者は爾の産に由りて不朽の衣を衣せられ、諸罪の暗の中に坐する者は光を見るを得たり。故に我等萬世に爾を歌ふ。

〔冠詞〕光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

人人の救たる童貞女よ、爾に由りて死者は活かさる、爾は實在の生命を生みたればなり。先の唾者は能く言ふ者と為り、癩者は潔められ。諸病は遠ざけられ、空気中の悪鬼の大数は勝たる。潔き者よ、爾は世界の為に救を生めり、我等之に由りて地より高きへ上げられたり。祝福せられし者よ、慶べ、爾は我等の為におほひと能力、垣牆と保固なり。故に我等歌ふ、造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

<第2のカノン、第3のカノン省略>

司祭 生神女光の母を讃歌ほめうたを以て讃め揚げん。

(詠) [ヘルビムの歌]

我が心は主を崇め、我が靈たましいは神我が救主を悦ぶ。

〔冠詞〕ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく榮え、真操みきおを破らずして神言かみことばを生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。



第1句

我が心は 主をあがめ 我が霊は 神 我が救主をよろこぶ  
たましい きゆうしゆ

附唱 各句の後に繰り返し

ヘルビムより尊とく セラフィムに並びなくさかえ  
とう なら

貞操を 破らずして 神ことばを 生みし  
めさお

実の生神女たる なんじを あがめほむ  
じようしんじよ

第2 [句] その婢の卑しきを顧み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、→ヘルビムより尊く

第3 [句] 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼を畏るる者に臨まん →ヘルビムより尊く

第4 [句] 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、→ヘルビムより尊く

第5 [句] 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなく帰らせ給へり。→ヘルビムより尊く

第6 [句] 其の僕、イスライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラムと其の裔を世世に憐れむ事を記憶し給へり、→ヘルビムより尊く

**第9 歌頌** 第1のカノン 第4調

(詠) イルモス4調「凡そ地に生まるる者は聖神に照らされて楽しみ、形なき智慧の性も祝い、神の母の聖なる祭を尊みて呼ぶべし、至りて福なる潔き生神女、永貞童女よ、喜べよ。」

第9歌頌

凡そ地に生まるるものは、 聖神に照らされて楽しみ

形なき 智慧の性も いわい

神の母の聖なる祭を 尊みて 呼ぶべし、

至りて福なる潔き生神女、 永貞童女や よろこべよ。

〔冠詞〕喜びの器よ、獨爾に喜ぶことはかなう。

少女よ、秘等信者は爾に由りて永在の歓喜に与る者と為りて、爾に慶べよと呼ばん為に、

我等を誘惑と、敵に\*とりこにせらるることと、其他罪を行ふ人人に多罪の為に及ぶ所の諸の禍より脱れしめ給へ。

**【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。**

爾は我等の光照及び防固と顛れたり。故に爾に呼ぶ、没せざる星、世界三大なる日を入れし者よ、慶べ。閉されたるエデムを開きし潔き者よ、慶べ。爾の上に灌がれたる盡きざる香料を承けし器よ、慶べ。

**【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。**

我等敬虔を抱きて我が神の家に立ちて呼ばん、世界の女宰よ、慶べ。我等衆の女君たるマリヤよ、慶べ。独女の中に無\*てんにして善美なる者よ、慶べ。人類を上なる生命に導く火の柱よ、慶べ。

**【冠詞】喜びの器よ、獨 爾に喜ぶことはかなう。**

慈憐なる主を生みし鴿たる永貞童女よ、慶べ。衆克肖者の誉、受難者の栄冠よ、慶べ。衆義人の神聖なる飾及び我等信者の救よ、慶べ。

**【冠詞】光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。**

ハリストス神よ、爾の嗣業を宥めて、今我等の悉くの罪を問ふこと勿れ、爾大なる慈憐に由りて人体を受けんことを欲せしを種なく地上に生みし者は我等の為に爾に祈る。

<第2のカノン、第3のカノン省略>

**【小連絡】** (通常の)

誦經 **【エクサポスティラリー】** 古世よりの奥密は今日知らる、神の言神は慈憐に因りて童貞女マリヤの子となる、ガウリイルは福音の歡喜を告ぐ。我等皆彼と偕に呼ばん、主の母よ、慶べ。

### エクサポスティラリー

古せいよりの奥みつーは 今日  
知らるかみのことばは慈憐に因りて  
童てい女マリアの子となーる  
ガブリーイルは福音のよろこびを告ぐ  
われ等みな彼とともに呼ーーばん  
主の母よよろこべ



喇叭の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。 [三歌齋經 P834]

**スティヒラ** 至聖なる童貞女よ、隠れたる奥密、天使等にも知られざる者は天使首ガウリイルに託せらる。彼は今爾独無\*てんにして善美なる鳩、我が族の喚起なる者に来りて、爾に慶べよと呼ばん、其言に由りて神言を爾の胎内に受くる為に己を備へ給へ。

鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

**スティヒラ** 至聖なる童貞女よ、隠れたる奥密、天使等にも知られざる者は天使首ガウリイルに託せらる。彼は今爾独無\*てんにして善美なる鳩、我が族の喚起なる者に来りて、爾に慶べよと呼ばん、其言に由りて神言を爾の胎内に受くる為に己を備へ給へ。

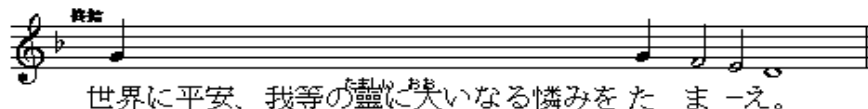
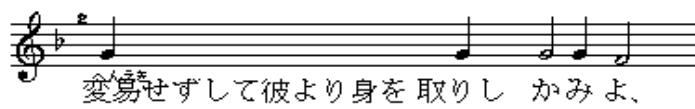
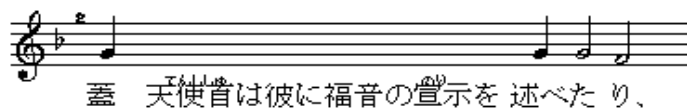
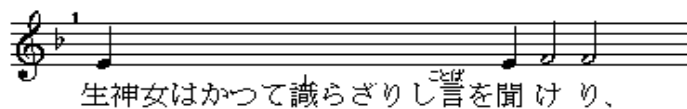
和聲の鉢を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉢を以て彼を讃め揚げよ。

**スティヒラ** 主宰よ、光明なる宮として、神女の潔き胎は爾の為に備へられたり、降りて其内に入り、爾の造物、猜忌に由りて誘はれて敵の奴隸と為り、始の善美を失ひて、爾の救の降臨を待つ者に恩恵を垂れ給へ。

凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ

**スティヒラ** 純潔なる者よ、天使首ガウリイルは顕に来りて爾に呼ばん、詛を解き、陥りし者を起す童貞女よ、慶べ、独神に選ばれたる者よ、慶べ、光榮の日の輅よ、慶べ。爾の腹に居らんと欲する無形の主を受けよ。

(詠) 光榮は父と子と聖神<sup>o</sup>に帰す、今も何時も世世に、「アミン」



司祭 光栄は爾我等に光を顕せる主に帰す。

(詠) [大頌詠] 時課経 P81

【大詠頌】司祭 光栄は爾我等に光を顕せる主に帰す、

♪ 至高きには光栄神に帰し、地には平安降り、人には恵み臨めり。



1. 主 天の王、神・父 全能者よ、主 <sup>どくせい</sup>独生の子イイスス・ハリストス、及び <sup>せいしん</sup>聖神よ、



<以下同様に A B 繰り返して歌う>

2. 爾の大なる光栄に<sup>よ、</sup>囚<sup>りて</sup>りて、我等 爾を崇め、爾を<sup>ほ</sup>讃<sup>め</sup>揚<sup>げ</sup>げ、

爾を伏し拜み、爾を尊み<sup>うたひ</sup>うたひりて、爾に感謝す。

3. 主 神よ、神の<sup>こひつじ</sup>羔、父の子、世の罪を任<sup>にな</sup>ひし者よ、我等を 憐み給へ、

世の<sup>もろもろ</sup>諸の罪を任<sup>にな</sup>ひし者よ、我等の<sup>いの</sup>禱りを <sup>い</sup>納れ給へ。

4. 父の右に坐する者よ、我等を 憐み給へ。

5. 爾は独り<sup>ひと</sup>聖なり、爾は独り主イイスス・ハリストス、神・父の光栄を 顕す者なればなり、

「アミン」

6. 我 日々に 爾を <sup>ほ</sup>讃<sup>め</sup>揚<sup>げ</sup>げりて、爾の名を 世々に 崇め歌はん。

7. 主よ、我を<sup>まも</sup>守りて、罪なくして この日を <sup>わた</sup>度らせ給へ。

8. 主 吾が先祖の<sup>かみ</sup>神よ、爾は <sup>ほ</sup>崇め讃められ 爾の名は 世々に 尊み歌わる「アミン」。

9. 主よ、爾を<sup>たの</sup>恃むに<sup>あづか</sup>りて、爾の 憐みを 我等に 垂れ給へ。

10. 主よ、爾は <sup>ほ</sup>崇め<sup>め</sup>讃めらる、爾の<sup>いまし</sup>誠めを我に <sup>おし</sup>訓へ給へ。(3次)

11. 主よ、爾は <sup>よ</sup>世々に 我等の <sup>あし</sup>避所たり。

12. 我曾て 言へり、主よ、我を憐み、  
 我が <sup>たましい</sup> 霊を <sup>いや</sup> 醫し 給へ、我 罪を 爾に 得たればなり。
13. 主よ、爾に 趨り附く、爾の旨を行ふを 我に教へ給へ、
14. 爾は我の 神、生命の源は 爾に在ればなり、  
 我等 爾の光に 於いて 光を觀ん。
15. 憐みを 爾を知る 者に 恒に 垂れ給へ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(3次)

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、「アミン」。

聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

(Святой Боже, Святой Крепкий, Святой Бесмертный, помилуй нас.)

【聖なる神】

聖なる神、 聖なる勇毅 聖なる常生 のものよ、  
 我等を <sup>あわ</sup> 憐れめよ、 (3回繰り返す)  
 光栄は 父と子と 聖神に 帰す 今も何時も 世世にアミン  
 聖なる常生 のものよ、 我等を <sup>あわ</sup> 憐れめよ、  
 聖なる神、 聖なる勇毅 聖なる常生 のものよ、  
 我等を <sup>あわ</sup> 憐れめよ、  
 (スラブ語)  
 スヴィヤティイ ボジェ スヴィヤティイ クレプ キー スヴィヤティイベス メールトゥヌイ ボ ミルイ ナース

【トロバリ】

(詠) 無形の者は命ぜられし事を奥密に知識に受けて、すみやかにイオシフの家に現れて、婚姻に與

らざる者に言へり、天を傾けて降りし主は変易なく全くして爾の内に入り給ふ。彼が爾の胎内に僕の形を受けしを見て、我驚きて爾に呼ぶ、<sup>よめ</sup>聘女ならぬ<sup>よめ</sup>聘女よ、慶べ。

**【重聯禱】**

輔祭 神や、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ。爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

(詠) 主憐めよ、(三次)

輔祭 我が国の天皇及び国を司る者の為に禱る、

輔祭 又教会を司る( )主教( )、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為に祈る。

輔祭 又恒に記憶せらる福たる此の聖堂の建立者、及び已に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の為に禱る、

輔祭 又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐・<sup>いのち</sup>生命・平安・壮健・救贖・眷顧・寛宥及び諸罪の赦を賜はんが為に禱る、

輔祭 又此の至尊なる聖堂に物を献り、善業を行ひ、之に勞し、之に歌ひ、及び此に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の為に禱る、

司祭 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神<sup>o</sup>に献ず、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

**【増連禱】** 通常の

輔祭 我等主の前に吾が朝の<sup>いのり</sup>禱を増し加へん、 (詠) 主憐めよ

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て我等を<sup>たす</sup>助け救ひ憐み護れよ、

輔祭 此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、 (詠) 主賜へよ

輔祭 平安の天使、正しき教導師、吾が靈体の守護者を賜はんことを主に求む、

輔祭 我等の罪と<sup>あやまち</sup>過とを<sup>なだ</sup>宥め<sup>ゆる</sup>赦さんことを主に求む、

輔祭 我等の<sup>たましい</sup>靈に善にして<sup>えき</sup>益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む、

輔祭 我等の<sup>いのち</sup>生命の余日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

輔祭 我等の<sup>いのち</sup>生命の終が「ハリストティアニン」に<sup>かな</sup>適ひ、<sup>やまい</sup>疾なく、<sup>おわり</sup>恥なく、平安なること、及びハリストスの畏る<sup>べ</sup>可き<sup>おい</sup>審判に於て<sup>こたへ</sup>宜しき<sup>なす</sup>對を賜はんことを求む、

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に<sup>おのおの</sup>各の身を以て、<sup>ならび</sup>並に<sup>ことごと</sup>悉くの我等の<sup>いのち</sup>生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主爾に

司祭 <sup>けだし</sup>蓋爾は仁慈と<sup>じれん</sup>慈憐と仁愛との神なり、我等光榮を爾父と子と聖神<sup>o</sup>に献ず、今も<sup>いつ</sup>何時も世世に、

(詠) 「アミン」

司祭 衆人に平安 (詠) 爾の神<sup>o</sup>にも

輔祭 我等の<sup>こうべ</sup>首を主に<sup>かが</sup>屈めん (詠) 主爾に

司祭 <sup>けだし</sup>蓋我が神よ、我等を憐みて救ふこと爾に帰す、我等光榮を爾父と子と聖神<sup>o</sup>に献ず、今も

何時も世世に、

(詠) 「アミン」

輔祭 睿智

(詠) 福を降せ

司祭 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」神よ、我が国の天皇と正教会の教えと正教のすべてのハリスティアニンを  
永く守り給へ。

司祭 至聖なる生神女や、我等の為に神に祈り給へ、

(詠) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、実  
の生神女たる爾を崇め讃む。

司祭 ハリストス神我等の恃みよ、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す、

(詠) 光荣は父と子と聖神<sup>o</sup>に帰す、今も何時も世々にアミン、主憐れめよ (三次)、福を降せ

司祭 ハリストス我等の真の神は、其至浄なる母、光荣にして讚美たる聖使徒、光荣なる凱旋の  
聖致命者、克肖捧神なる吾が諸神父、聖某、(本堂及び本日聖人) 聖にして義なる神の祖父  
母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救はん、彼は善にして人  
を愛する主なればなり。

(詠) アミン、

[萬寿詞] 神よ、我が国の天皇を、国を司る者、我等の( )主教 ( )、および正教の  
ハリスティアニン等を幾とせにも護り給へ。